

## 「インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学農学部1年 柴田優里香

学んだこととして大きいのは日本では感じることの少なかった身体感覚である。渡航前にジャカルタの雨温図も写真も見たことがあって、宗教や文化についても少しは調べていたので、何となく知っているつもりでいた。しかし初日にスカルノ・ハッタ空港から宿泊先に向かう間、自分が何一つちゃんとは知らなかったことに気づかされた。五感を研ぎ澄ませて、現地にしかないヤシの木の大きさを感じ、その土地にしかない音を聞き、洪水直後のパサル・ミングの水たまりにスニーカーを突っ込み、冷たくて生温かいスコールに打たれ、屋台街の匂いの中を歩く。信号機があっても道を横断するときには手でおびたしい数の車やバイクに合図を送りながら渡る。頭で知識として理解してただけで、実感が伴わないものだったからではないかと感じる。身体の時間は頭脳のそれよりもはるかに遅いことを改めて確認した。その後、自分が十分に調べたと思っていた『頭の中の知識』すらも全く十分ではなかったことを滞在期間中何度も痛感することになった。

プログラムでは主にインドネシア語を学んだのだが、語学を学ぶことそれ自体は目的ではなく、言葉を使って何ができるかこそが大切なのだとは私はずっと考えてきた。『インドネシア語は習得の簡単な言語』といわれてそれを真に受けていたが、やはり言語である以上ある程度の単語と文法の習得は必須であり、第二外国語として履修していたフランス語よりややましというレベルまでしか到達しなかった。ちなみにジャカルタ近郊であっても英語が通じるとは限らない(日本人複数で行動していて誰の英語も通じなかった場合があった)ため、英語さえ学んでおけばいいという考えが誤りであることも痛感した。せめて日本で出来ることくらいは日本でしておくべきだった。

文化的なものとしては、朝5時のアザーン、食堂を含めて至る所で見かける猫とどこへ行っても見かけない犬、暑いのに決して半袖を着ない女性といった風景から、イスラム教が根付いていることを何度も実感した。一方でインドネシア大学の学生たちはイスラム教の制約から来る息苦しさをほとんど感じていないように見えた(見えた、だけかも知れない)。インドネシアはイスラム教国家としては戒律が緩い方らしく(クリスチャンや仏教徒もいるので)、ポケモンやアニメは普通に居るし、ヘジャブをかぶらないムスリマも居る。ブルカを着ていながらバスや電車に乗る際の高い段差をものともしない女性たちも見た。日曜日にイスティクルモスク(メッカ、メディナに次ぐ世界3位の規模のモスク)に行ったとき、祈っている人がもちろん多かったが、輪になって喋っている人、寝ている人、走り回る子どもなど、いろいろな人が居た。宗教施設ということでもかなり構えていたけれども、そういうところも含めて日常の空間なのだと、なにか虚を突かれたように思う。また、環太平洋造山帯に属し、地震や洪水の危険が高いにもかかわらず、『地震が起きたときどうすべきか』といった教育はあまり受けていないとインドネシア大学の学生が話してくれた。日本との防災意識の違いが窺えたが、知識が全く足りずより深い考察をすることが出来なかったのは反省点として残る。

インドネシア大学の学生と一緒にプログラムに参加した京都大学の学生と、はじめの一週間で会話の糸口を見つけられず密なコミュニケーションがとれなかったことにも悔いが残る。そのような状況でも、7日目の夜、インドネシア大学の学生と自殺について話したことは印象に残っている。『日本の電車でヤクザが手首を切って自殺したって聞いたけど、日本でそういうのはよくあることなの?』という話から始まり、『日本人はどうしてそんなにたくさんの人が自殺するの?』と聞かれたとき、とっさには答えられなかった。いくつかの仮説を思いついたものの、どれもはっきりした裏打ちはなかった。

今回の研修でわかったことは、少なくともジャカルタ周辺で2週間暮らしたくらいでは大きく体調を崩さないことだ。私事だが、これで海外への不安がだいぶ軽減された。また事前準備が足りず、知識が足りなかったため深い見方をすることが出来なかった。もしかしたらどれほど念入りに準備しても準備不足を感じるようになるのかもしれないが、最低限がなんなのかは少しつかめたと思う。将来はこんなことをしたい、という具体的なビジョンはまだないし、そのことにコンプレックスを感じても居る。しかし今は出来ることをやるしかない。今出来ること、とは、やりたいことが生まれたときに『経験不足』などという理由で断念しなければいけない確率を下げることだと考えている。